

原田種成著「私の漢文講義」大修館書店 1995年10月1日刊を読む

『貞観政要(じょうがんせいよう)』の世界

1. 『貞観政要』は、中国の代表的な帝王学(たいそう)の書である。「貞観」とは唐の太宗の年号(627-649)で、唐の太宗は中国史上において傑出した大政治家であったばかりでなく、世界史上においても、有数な大政治家の一人であった。
2. 唐の太宗(りせいみん)は漢末以来 400 余年にわたって戦乱の絶え間がなかった中国全土を平定統一し、唐朝 300 年の文化国家の基礎を築いた。その時代は非常に平和でよく治まった時代であったから「貞観の治」と称した。
3. 日本は唐の都の長安に遣唐使、留学生を派遣して高度な学術文化を積極的に採り入れて奈良、平安の文化の華を開いたのであった。その太宗の政治に関する言行を記録した書が『貞観政要』である。
4. 中国では、皇帝は天の意志を体して仁慈の心で万民を愛育しなければならないものであるという、帝王はいかにあるべきかという理念があり、臣下はまた我が天子を理想的な天子にするのが責務であるという考えがあった。これはヨーロッパの皇帝が国民を私有物視していたのとは異なるところであり、帝王はいかにあるべきかという帝王学が中国に発達した理由である。それは儒教道徳に基準を置いたものであった。だから天子は儒教の理想とする皇帝である堯・舜(しゆん)や禹、周の文王・武王を自らの理想とし、臣下は儒教道徳を基準にして、天子の政治に欠失がないようにと一身一家を顧みず、場合によっては死を覚悟して諫めることがあったのである。
5. それゆえ『貞観政要』は、かつては教養人の必読書であり、今日の指導者にとっても有益な内容が多い書である。

P192 ~ 193

[コメント]

「貞観政要」研究の世界的第一人者の原田種成先生の漢文勉強法である「音読」は大いに参考になる。

- 2009年2月14日林明夫記 -

